

# 松野殿女房御返事

弘安二年六月二〇日 五八歳

麦一箱・いえのいも一籠<sup>こ</sup>・うり一籠<sup>かたがた</sup>等 旁<sup>た</sup>の物六月三日に給ひ候ひしを、今まで御返事申し候はざりし事恐れ入って候。

此の身延の沢と申す処は、甲斐国の飯井野<sup>い い の</sup>・御牧<sup>み まき</sup>・波木井の三箇郷の内、波木井の郷の戌亥の隅にあたりて候。北には身延の岳天<sup>たけ</sup>をいたゞき、南には鷹取が岳雲につゞき、東には天子の岳日とたけ<sup>同</sup>をなじ。西には又峨々として大山つゞきて、しらねの岳にわたれり。猿<sup>ましら</sup>のなく音天<sup>こえ</sup>に響き、蝉のさゑづり地にみてり。天竺の靈山<sup>こ こ</sup>此処に来たれり、唐土の天台山<sup>まのあた</sup> 親<sup>まのあた</sup>りこゝに見る。我が身は釈迦仏にあらず、天台大師にてはなけれども、まかるまかる昼夜に法華経をよみ、朝暮に摩訶止観を談ずれば、靈山浄土にも相似たり、天台山にも異ならず。

但し有<sup>うだい</sup>待<sup>えしん</sup>の依身なれば、著<sup>き</sup>ざれば風身にしみ、食<sup>く</sup>らはざれば命持ちがたし。灯に油をつがず、火に薪を加へざるが如し。命いかでかつぐべきやらん。命<sup>つ</sup>続<sup>つ</sup>ぎがたく、つぐべき力絶へては、或は一日乃至五日、既に法華経読誦の音も絶へぬべし、止観のまどの前には草しげりなん。

かくの如く候に、いかにして思ひ寄せ給ひぬらん。兔<sup>うさぎ</sup>は経行の者を供養せしかば、天帝<sup>てんたい</sup>哀れみをなして月の中に<sup>置</sup>をかせ給ひぬ。今天を仰ぎ見るに月の中に兔あり。されば女人の御身として、かゝる濁世末代に、法華経を供養しましませば、梵王も天眼を以て御覧じ、帝釈は掌を合はせてをがませ給ひ、地神は御足をいたゞきて喜び、釈迦仏は靈山より御手をのべて御<sup>おん</sup>頂<sup>ただき</sup>をなでさせ給ふらん。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。恐々謹言。

六月廿日

日 蓮 花 押

松野殿女房御返事